



ガール・オブ・ザ・ナイト
パンク・グレイ・エル・カ
ラブ・レー

チルドレン・オブ・ザ・ストリート

ペロ・童話集

他 3 編

世界 少年少女 文学全集

ガルガンチュエと物語
パンタグリェル
ラブレール作

ラ・フォンテーヌ寓話集
ラ・フォンテーヌ作

ペロー童話集 他3編
ペロー作

佐藤輝夫 渡辺一夫 市原豊太
佐藤正彰 小林 正
訳

創元社

11

世界
少年少女
文学全集

11

フランス編 1

第二十二回
配本

定価380円

万一乱丁落丁がありましたら
たからお取り替え致します

昭和 29 年 7 月 31 日 発 行

訳者代表 わた なべ かず お
渡 辺 一 夫

発行者 小 林 茂
東京都中央区日本橋小舟町2ノ4

印刷者 島 田 耕 三
東京都港区芝新橋4ノ33

発行所 株式 東京
会社 創元 社
東京都中央区日本橋小舟町2ノ4
電話（茅場町）1734, 2064, 4083
振 替 ・ 東 京 1 5 6 5

印刷所 島田精版印刷所
製本所 鈴木製本所
本文用紙 日本製紙株式会社特選
本文用紙納入 小島洋紙店
ク ロ ス 日本クロス株式会社特製

Printed in Japan

目
次



第 世
11 界
卷 少
 少
 女
 年
フ 文
ラ 学
ン ス
ス 全
編 集
1





きつね物語 もつねものがたり

佐藤輝夫 訳 9

第一の話 ばかされたきつね 11

第二の話 屋根から塩ぶたをつる 19

第三の話 うぬぼれからすとおおかみ 24

第四の話 きつねのはかりごと 28

第五の話 まる坊主にされたおおかみ 33

第六の話 きつねとおおかみのうなぎつり 37

第七の話 べてんにかかったおおかみ 41

ガルガンチュワとパンタグリュエルの物語 ものものがたり

渡辺一夫 訳 55

第一の書 ガルガンチュワの物語 57

読者に 57

1 少年ガルガンチュワ 58

2 ガルガンチュワ パリへのぼる 68





第二の書 パンタグリユエルの物語

3	ビコロコル軍の侵入	75
4	ガルガンチュワの奮戦	83
5	テレームの僧院	90

第三の書 パンタグリユエルとパニユルジュとの結婚問答

1	パンタグリユエルのおいたち	94
2	パンタグリユエル 諸国をめぐる	100
3	父ガルガンチュワの手紙	104
4	パニユルジュの登場	110
5	ジブソード国征伐	117
6	たたかいおわって	125
第三の書	パンタグリユエルとパニユルジュとの結婚問答	129
1	パニユルジュの借金	129
2	パニユルジュが結婚したいと思う	137
3	太鼓にばけた夢	141
4	魔女と大猫悟老	147





ラ・フォンテーヌ寓話集

市原豊太朗訳

第四の書 パンタグリユエルの航海

- 5 ジャン御坊のご意見 153
 6 哲学者先生の判断 157
 7 さて、けっきょく 162

- 1 パンタグリユエル一行海に乗りだす 167
 2 なぐられて喜ぶ妙な人種 174
 3 大あらし 179
 4 おばけ島めぐり 188
 5 文明大博士の話 196
 6 とつくり明神のおつけのことは 201

おおかみと犬 209

子牛とやぎとひつじとしし 210

死に神と不幸な男 211





さるにきつねをうったえたおおかみ

212

二匹の雄牛とかえる

212

こうもりと二匹のいたち

213

雌の獵犬とその友だち

214

わしとかみきり虫

215

ししとぶよ

217

海绵をつんだらばと塩をつんだらば

218

うさぎとかえる

219

イソップが解いた遺言

220

わしといのししとねこ

222

痛風とくも

223

きつねとぶどう

225

年をとったしし

225

納屋にはいったいたち

226

くじゃくの羽をつけたかけす

226





ペ
ロ
ー
童
話
集

「エリザベト・シャルロット・ドルレアン」公女にささぐ

241

佐
藤
正
彰
訳

239

おおかみとやぎと子やぎ……………227
 ソクラテスのことは……………228
 うさぎの耳……………228
 しっぽを切られたきつね……………229
 聖者のかたみを運ぶ……………230
 わしとふくろう……………231
 おんどりとねこと子ねずみ……………232
 老人とろば……………233
 しかの水鏡……………234
 村男とへび……………235
 病気のししときつね……………235
 鳥さしとあおたかとひばり……………236





解かい

説せつ

訳

者
383

美女びよと野獸やじゆう

小波
林正夫
訳人
361

青い鳥

小波
林正夫
訳人
309

おろかなねがい

304

ろばの皮かわ

291

とさか毛げのリケ

282

サンドリヨンまたは小さなガラスの上靴うわぐつ

273

仙女せんじょ

270

ねこ先生または長靴ながぐつをはいたねこ

264

青ひげ

257

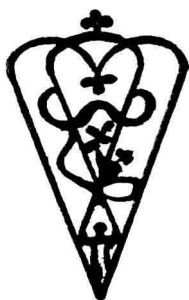
赤ずきん

254

ねむりの森の美女びよ

243





さし絵
そうてい

鷹山 高橋 初山
宇 忠 滋
一 彌

きつね物語

佐藤輝夫訳

さし
絵
鷹
山
宇
一



第一の話 ばかされたきつね

それは五月のことでした。さんざしの木には花が咲き、枯れていた牧場の草も、森も、またあおあおといきおいづいてきました。鳥は、夜となく昼となく、楽しそうにさえずっています。

きつねのルナールは、自分の住み家の城の中に食べもの

がすっかりなくなってしまったので、たいそうこまっておりました。妻のエルムリースは、ひもじい！ ひもじい！と言うじ、子どもは子どもで、みんなおなかをすかして泣いています。そこで、きつねのルナールは、何か食べものをさがしてこようと決心して、出かけることにしました。ルナールは、外に出ると、おおぜい人の通る街道をさけて、森の中にかくれました。この森は、これまでもしょっちゅう歩きまわっているの、たといまんなかの道を通らなくとも、どこへどうぬけられるか、十分かつてを知っていました。ルナールは、この森の中を、何か食べものはないだろうかとさがしながら、歩きまわりました。しかし、なんにも見つけることができません。そして、とうとう、まだ一度もきたことのないようなところへ出てしまいました。

「おやおや！ きれいなところだなあ！ こいつはすてきだ！ 森があって、小川が流れて、それに、花ですっかりおおわれた緑の牧場がある。こんな美しいところは、これまで見たことがない。食べものがあって、こんなところにいられたら、どんなに気持がいいだろうなあ！」

ルナールは、しばらく見とれていましたが、やがて、ふと気がつくと、またかけだしました。前を、うしろを、右を左を、何か食べものはないかとさがしながら。けれど、なんにも見つかりません。一わの鳥も一匹の小うさぎも。

こんどは、ある農家のほうにつづく道を、歩いて行きました。農家のそばまできたとき、人にも見つけられてはたいへんだ、と思って、道のかたわらにとびだしました。それから、生垣にそって、おいしい風をすいこみながら、こっそり歩いて行きました。どうか神さま、人間にかまえられませんか、お守りくださいませ、そして、妻や子どもたちを、喜ばしてやれるような、何かすばらしいごちそうをおさずくださいませ！ と、一生けんめい、心の中で祈りをささげながら。

この農場の中には、バルトーという、たいそう金持のお百姓が住んでいました。広いかこの中に屋敷があつて、雌牛や雄牛やひつじややぎや、めんどりやひなや、食用のにわとりや、そのほかいろいろな果樹など、ありとあらゆる地上の宝がいっぱいあります。ルナールは考えました。「ああ！ もしも、この中にはいれたら、なんでもうまい

ものは取りほうだいなんだがなあ！」

しかし、家も庭も、すっかり、長くてとんがった太い杭のさくでかこまれていたのでした。そのうえ、屋敷のまわりには、ひとすじの川が流れております。

バルトーというこの百姓は、たいそう金持でした。ところが、お金をもうけることばかり考えて、ちっとも使うことはしないのです。自分の飼っているにわとりを、ただの一わでも、自分で食べようなんて考えません。そんなことをするくらいなら、たといいたくとも、自分のあごにはえているひげを、一本一本ぬかれた方がいいと考えるようになけちな百姓でした。かれは、こうした家畜やにわとりなどを、みんな市場に運んで行って、売るのでした。一度だつて自分では食べたことはないのです。ルナールだったらどうしたでしょう。きっと手あたりしだいにみんな食べてしまったことでしょう！

このとき百姓はただひとりうちにいました。妻はつむいだ糸を売りに出かけていました。ほかの人たちも、めいめいしごとがあつて、おもてへ出て行っていました。

ルナールはさくの二本の杭のあいだから、食用のにわと

りがたくさん日なたぼっこをしたり、おんどりのノアレが目をばちくりさせたり、めんどりやひよこが、ほこりを足でかいたりしているのを見つけました。ルナールは、どうにかして、このかこいの中にはいりたいと思って、ぐるぐると、さくの外をまわって、入口をさがしました。そして、とうとう、一本のくさった杭の下ところに、雨がふると、庭の中の水が流れる小さな穴を見つけました。この穴をくぐって、やっと、庭の中にはいることができました。

中にはいると、ルナールは、いばらの木の生垣の下にそっとかくれて、身動きひとつせず、じいっと、おんどりをうかがっていました。おんどりは、ルナールがはいってきたのを、まるっきり知らないのです。ほかのたくさんのおんどりだって、同じように知らないのです。

おんどりのノアレは、庭の中をゆうゆうと、あっちへ行ったり、こっちへきたり、歩きまわって、くちばしで地面をついたり、足でかいたり、く、く、くっ！と言ってめんどりを呼んだりしています。すると、ふと、おんどりは、ルナールがかくれている生垣の前を通りました。ええ

りと、ルナールは、すばやくおんどりにとびかかりました。ところが、失敗でした。ノアレが、ぱっと横にとびのいたからです。ノアレは、くわっくわっ！と叫びながら一生存めい逃げだしました。ルナールは、しそんじたのに腹をたてて、どどん追いかけました。ノアレは、いっそうさわぎたてながら、逃げて行きます。

百姓のベルトーは、おんどりがやかましく鳴き叫ぶのを耳にしました。ほかのめんどりもひよこも、負けずにくわっ、くわっと叫んでいます。ベルトーは、おもてに出てみました。すると、そこにはきつねのルナールがいたので、大いそぎで、うちへとってかえして、二つの網を手にとってとびだしてきました。

ルナールは、一本のキャベツの下にかくれました。百姓は、鳥とりでも狩りうどでもありませんでしたが、持ってきた二つの網を、キャベツ畑の上にさっとひろげ、ルナールをのしりながら、叫んだりわめいたりしたのです。しかしルナールは、すがたをあらわしません。百姓は、キャベツを棒でめったやたらにたたきつけて、こなごなにしてしまいました。ルナールは、たたかれまいと、キャベツの

下からさっとびだしました。ところが、一つの網のちゅうどまんなかにひっかかってしまったのです。つかまったのだ！ ルナールは、網の中で、あっちへ向いたりこっちへ向いたり、さかんに、いろいろと向きを変えましたが、もがけばもがくほど網はからだにからみついてくるので、どうにもなりません。百姓はわめきました。

「おのれ！ さあ、つかまえたぞー！」

百姓は足をあげて、ルナールの首を、えいっとばかりふみつけようとしてました。と、そのとき、ルナールはベルトの足のかかとかみつきました。あんまり強くかんたので、そのいたいことといったら。百姓は顔色を変え、まさおになって、ばったり、地面にたおれてしまいました。けれども、はなしたら、ぶたれることを知っているのです。ルナールは、はなしません。かみついたままです。百姓はわれにかえると、さっそくルナールをひきはなそうと思ひ、その大きな指で、ルナールのおごをつかんで、口をあけさせようとしてました。すると、そのとき、こんどは百姓の手にかみついたのです。これで百姓は、足と手とを、ルナールの齒のあいだに、がっちはさまれてしまっ

たようになくなりました。

「かわいそうにねえ！ いっそのことルナールを逃がしてやればよかったのだよ。ルナールにかかっていくなんて、まったくばかなことをしたもんだ！」

ルナールは、ベルトをひどくおどかしました。

「さあ、つかまえたぞー！ おれは、おまえをころしてやる！」

百姓は泣きながら、ため息をついて言いました。

「ルナールさん、おなさけだから、はなしてください。はなしてから、なんでも好きなことを言いつけてください。わたしはなんでもきいてあげます。いえいえ、死ぬまで、あなたの家来になりますよ。」

「あわれなこの気ちがいめ！ きたないこの土百姓！ 何をぬかすか。今の今まで、おれをつかまえたと思って、さんさん、悪口をたたいていたくせに！ おれをつかまえようと、網なんかはりおったが、天罰できめん、こんどはおまえがひどいめにあう番だ。おまえのいのちは、わしがもらったぞー！」

百姓は泣きつづけました。